

病院 心臓病に強い 探訪

心臓病には、冠動脈が詰まる心筋梗塞など救急救命を必要とする病気や、心臓弁の機能が低下する弁膜症、血管につながる大動脈疾患などさまざまな病態がある。いずれも手術による治療法は確立してい



るが、さらにハイレベルな技術向上を実現しているのが、帝京大学医学部附属病院心臓血管外科だ。救命救急には24時間体制で対応している。狭心症の血流を再開する冠動脈バイパス手術では、人工心臓を使わないオフポンプ手術

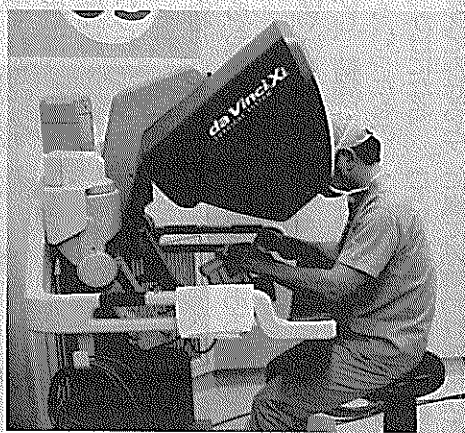
の状態で合わせて、手術とカテーテル治療を組み合わせたハイブリッドな治療も行う。さらに、僧帽弁閉鎖不全症では、通常は胸の中央を開いて手術をするのが、右乳房の下から6センチ程度のキズで治療す

帝京大学医学部附属病院心臓血管外科

低侵襲手術で患者のQOLを守る

「患者さんの中には、手術後にライフスタイルが変わることを心配される方がいます。低侵襲手術は回復が早く、短期間で社会復帰もできるため、患者さんに安心して治療を受けていただくことに貢献中だ。」(安達純子)

るなど、身体への負担の少ない「低侵襲弁膜症手術」を実践している。「心臓につながる大動脈の弁閉鎖不全にも、右脇の辺りからアプローチする低侵襲手術をしてい



手術支援ロボットさらに改良

帝京大学医学部附属病院は、昨年2月、最新の手術支援ロボット「ダヴィンチXi」を導入した。以前から第2世代の「ダヴィンチ」を使用していたが、今回は第4世代でポートなどが改良されているという。同病院の心臓血管外科では、冠動脈バイパス術で使用する「内胸動脈」を取るときなどに「ダヴィンチXi」を使用している。胸を大きく切らずに済むのが利点だ。同院は、日本胸部外科学会「ロボット心臓手術関連学会協議会」の数少ない認定施設になっているだけに、今後の治療の発展に期待したい。

〒173-8606 東京都板橋区加賀2の11の1 電話/03・3964・1211

「低侵襲手術の実現は、技術レベルの高さに加え、医療機器の進歩も後押ししている。医療機器では、同科は、最新の手術支援ロボット「ダヴィンチ」も導入した。しかし、下川教授は新しい医療機器の使用には、慎重な態度で臨んでいる。私たちが、人の手でやる低侵襲手術の技術を確立していきま

上に貢献するのが目的です」

「心不全や大動脈解離など命に関わる症例の手術を数多くこなす。その一方で、早期の僧帽弁閉鎖不全症に対しては、無症

状で手術を受けて胸にキズが残りに、落ち込む患者に心を痛めている。この状況を変えるべく低

侵襲手術を積極的に取り組んで

(安達純子)